

現代紀行文學全集

寫真篇

現代紀行文文學全集

道
社

現代紀行文學全集

第十卷 寫眞篇

志賀直哉
佐藤春夫監修
川端康成



昭和三十三年十二月十五日印刷
昭和三十三年十二月二十日發行

定價四八〇圓

發行者東京都千代田區神田一ツ橋二ノ五 秋山修道
印刷者東京都文京區春日町三の四 猪瀬英一
發行所東京都千代田區神田一ツ橋二ノ五 株式會社 修道社

電話(33)〇五〇一 振替口座(東京)六一六九一
印刷・濺瀨印刷 KK 製本・山田製本 KK

目次

大沼	熊の足跡	北海道	網走刑務所	網走	八木義徳
時計台	北海道遊記	宇野浩二	利尻島	天塩の原野に沈む	武田泰淳
函館山	東海の小島の思ひ出	亀井勝一郎	十三湖	津軽の旅	青森
阿寒の原始林	北海道紀行	桑原武夫	龍飛	津軽半島より	柳田国男
千歳線風景	千歳線風景	伊藤整	赤沼と赤倉岳	山上の池沼	安倍能成
空知川	空知川の岸辺	国木田独歩	釜伏山と大湊の町	恐山半島記	深田久弥
函館から札幌まで	札幌まで	小宮豊隆	下風呂温泉から見たイカとり舟の火	雪の下北半島紀行	佐藤春夫
神威古潭	雪中行	石川啄木	中津川を手前に巖手山を見る	みちのくの旅	井上靖
東旭川の田園から大雪山をのぞむ	東旭川村にて	島木健作			野上弥生子
紫雲古津村	太古の国の通路から	金田一京助			秋田
摩周湖	摩周湖紀行	林芙美子	男鹿の絶景	遊行雑記	幸田露伴
猿留の難道	日高十勝の記憶	岩野泡鳴	十和田湖	十和田湖	泉鏡花
ノサップ灯台	ハボマイ紀行	火野葦平	奥入瀬の溪流	十和田湖	大町桂月
ウダイ釣り	オホーツクの海と日高の海	草野心平	八郎潟	をがさべり	柳田国男

旭川と平源の宿
象 湯

横手の雨
日本海の波

奥野 信太郎 三
久保田万太郎 三

飛鳥遠望
酒田港から鳥海山をのぞむ

羽後の海岸
「奥の細道」の杖の跡

田山 花袋 三
井伏 鱒二 三

大豆 島

豆の葉と太陽

柳田 国男 三

上戸付近から見た猪苗代湖と磐梯山

勢至堂峠から白河へ

柳田 国男 三

種市町小子内部落
ウミネコのすむ燕島から八戸港(鮫浦)を見る

清光館哀史
久慈街道

柳田 国男 三
井伏 鱒二 三

中沢温泉
保成峠入口の牧場

中沢温泉
保成峠

河上 徹太郎 三
大岡 昇平 三

光太郎の山荘

みちのく便り

高村 光太郎 三

山小屋から磐梯山をのぞむ

磐梯高原の熊

由起 しげ子 三

鉛 温泉

花巻温泉

高村 光太郎 三

安達が原の阿武隈川

はて知らずの記

正岡 子規 三

鶴銅橋と姫神山

陸奥紀行

吉井 勇 三

甲子温泉の溪谷

甲子温泉行

結城 哀草果 三

遠野市遠望

遠野物語

柳田 国男 三

半蔵門の堀端

日和下駄

永井 荷風 三

種山ヶ原の入口

みちのくの牧歌

串田 孫一 三

綾瀬川

水の東京

幸田 露伴 三

衣川の展望

中尊寺を観るの記

長与 善郎 三

永代橋

隅田川の諸橋

木下 李太郎 三

金色 堂

旅 信

安倍 能成 三

桜田 門

千代田城

亀井 勝一郎 三

北上川の川口にある石巻港

三陸廻り

高村 光太郎 三

雑木林

武蔵野

国木田 独歩 三

賑う塩竈港

石 巻

白井 吉見 三

高尾山から八王子方面

高尾山紀行

正岡 子規 三

夕暮れの松島

仙台から金華山へ

田山 花袋 三

大島

大島行

林 芙美子 三

松 島

松島秋色

滝井 孝作 三

八丈島の熔岩の石垣と道

小笠原紀行

小林 秀雄 三

鳴子温泉

松島に於て芭蕉翁を読む

北村 透谷 三

犬吠岬

房総鼻眼鏡

内田 百閒 三

山 形

志賀 直哉 三

犬吠岬の灯台と暁鷄館

犬吠岬紀行

吉田 絃二郎 三

古口下流の最上川

最上川

阿部 次郎 三

九十九里の浜

九十九里浜の初夏

高村 光太郎 三

崖の観音	松風日記	大和田 建樹 六	榛名湖	榛名	横光 利一 六
土浦の港	土浦の川口	長塚 節 六	大宮公園	写生紀行	寺田 寅彦 六
潮来十二橋	潮来十二橋	水原 秋桜子 七	児玉	或る田舎町の魅力	吉田 健一 六
舟着場から見た川岸屋	真菰の中	久保田万太郎 七	武甲山	妻坂越	河井 醉茗 七
筑波山	水郷めぐり	若山 牧水 七	水無川	游秦野記	柳田 国男 七
霞ヶ浦	筑波遊記	徳富 蘇峰 七	片瀬付近から富士・大山をのぞむ	ふところ日記	川上 眉山 七
清琴楼付近	うつしゑ日記	幸田 露伴 七	大仏	鎌倉一見の記	正岡 子規 七
中禅寺湖	塩原日記	岩野 泡鳴 七	七里ヶ浜	滑川畔にて	嘉村 礪多 七
三斗小屋温泉	日光	田山 花袋 七	城ヶ島から三崎港	劍崎沖の風	幸田 露伴 七
華厳の滝	那須より会津へ	田部 重治 七	湯ヶ原夜景	湯ヶ原ゆき	国木田 独步 七
	華厳の滝	幸田 露伴 七	蜜柑山	熱海まで	幸田 文 七
	紅葉の旅	大町 桂月 七	富士	不二の高根	遅塚 麗水 七
		群馬	駒ヶ岳	箱根の山々	近松 秋江 七
直哉の小屋のあつた所からKさんの宿をのぞむ	赤城にて或日	志賀 直哉 七	独鈷の湯	私の伊豆	川端 康成 七
駒ヶ岳より大沼	焚火	志賀 直哉 七	奎太郎の詩碑のある所から伊東の港を見る	海郷風物記	木下 奎太郎 七
花敷温泉	赤城行	尾崎 一雄 七	初島をのぞむ	初島紀行	与謝野 晶子 七
草津温泉	みなかみ紀行	若山 牧水 七	長津呂（石室崎）	伊豆の旅	島崎 藤村 七
浅間山頂付近	草津温泉	志賀 直哉 七		豆北豆南	蒲原 有明 七
伊香保温泉の坂道	浅間登山記	正宗 白鳥 七	由比から浦原の丘陵を見る	万葉紀行―田児の蒲	土屋 文明 七
	伊香保	寺田 寅彦 六			

三保の松原	清見潟日記	高山 樗牛 三	上高地温泉付近の風景	雨の上高地	寺田 寅彦 三
安部川と手越の里	東海道五十三次	岡本 かの子 二	ウェストンの記念碑	明 神 池	窪田 空穂 二
竜華寺	清見潟の一夏	姉崎 嘲風 二	焼ケ岳	焼ケ岳	尾崎 一雄 三
山中湖	山中湖畔野鳥行	山梨 川端 康成 三	梓川から穂高の山々を のぞむ	槍ヶ嶽紀行	芥川 竜之介 二
河口湖	道学先生の旅	戸川 秋骨 三	恵那山	かけはしの記	正岡 子規 三
吉田からの富士	湖水めぐり	野上 豊一郎 三	絵島の墓	木曾路	石田 波郷 三
河口湖と富士	富嶽百景	太宰 治 三	静かな天竜川	山峡小記	斎藤 茂吉 三
富士山頂	富士山	小泉 八雲 二	天竜峽	天竜川	小島 烏水 三
酒折宮	甲斐わかひこ路	井伏 鱒二 二	小海線から八ヶ岳を見る	天龍川を下る	和辻 哲郎 三
龍坂峠	木枯紀行	若山 牧水 二	八ヶ岳の裾野	御所平と信州峠	尾崎 喜八 二
大野町付近の三輪川 池ノ原公園の翠山玉碎 の家	秋風帖	愛知 柳田 国男 三	富士見高原からの八ヶ岳	秋風の吹く頃に	柳田 国男 三
篠島	遊海島記	笹川 臨風 二	霧科高原	富士見高原	田宮 虎彦 三
伊良湖から神島をのぞむ	伊良湖の旅	柳田 国男 二	雨に煙る霧ヶ峰の林	霧ヶ峰から鷲ヶ峰へ	片山 敏彦 三
木曾川下り	日本ライン	吉江 喬松 三	山田温泉	みちの記	徳田 秋声 二
犬山城	白帝城	北原 白秋 三	北軽風景	山を想ふ	森 鷗外 三
中山七里の益田川	飛騨の風景	岐阜 北原 白秋 三	浅間山麓の夏景色	信濃日記	水上 滝太郎 二
高山大雄寺の仁王像	飛騨の顔	滝井 孝作 三	追分の宿	軽井沢にて	有島 武郎 二
		坂口 安吾 三	根津部落と鳥帽子山	浅間山麓より	正宗 白鳥 三
		長野	上田の城	雉子日記	谷川 徹三 三
				鳥帽子山麓の牧場	堀 辰雄 二
				豊年虫	島崎 藤村 二
					志賀 直哉 二

上林温泉からの展望
発哺温泉からの展望

戸隠

浅間山

一茶終焉の家

野尻湖弁天の祠

鹿島川より鹿島槍方面

善光寺

夕暮れの弥彦山

両津湾

相川の町

加茂湖

尖閣湾の手前の達者部落

親不知

万代橋

伏木港

弥陀ヶ原と後立山連峰

続山峡小記

カヤの平

志賀高原

戸隠行

北信早春譜

湖畔

霧の旅

針ノ木峠

『更科紀行』の跡

弥彦山

佐渡まで

佐渡一巡記

佐渡ヶ島

大佐渡小佐渡

親不知、子不知

煙霞療養

富山の薬と越後の毒消し

だいらの小屋

四月の山の手帖から

斎藤茂吉

小林秀雄

三好達治

高浜虚子

野上豊一郎

中村草田男

吉江喬松

長谷川如是閑

河東碧梧桐

荻原井泉水

新潟

長塚節

尾崎紅葉

柳田国男

吉井勇

井上靖

深田久弥

尾崎紅葉

富山

坂口安吾

安部能成

浦松佐美太郎

七尾風景

七尾の波止場

卯辰山の秋声文学碑

兼六公園

福井城趾

水の美しい武生

若狭湾の夕景

敦賀港

五十鈴川

的矢湾

関から鈴鹿山脈をのぞむ

雨の英虞湾

竹生島と腰ヶ岳伊吹山

など

比叡山遠望

汽車の窓から見た琵琶湖

比叡山からの琵琶湖

鳥居本の旧い宿場

三井寺と琵琶湖

息長川と伊吹山

北越の夏
万葉紀行―能登いやひめ

郷里へ来て

金沢行

北陸の旅

栃の実

若狭道

旅日記

月ヶ瀬紀行

伊勢の的矢の日和山

伊賀

横山

湖光島影

山中雜記

二銭紀

比叡

湖畔の秋

紅葉狩

関の藤川

阿部次郎

土屋文明

徳田秋声

長谷川如是閑

福井

吉田絃二郎

泉鏡花

田山花袋

二葉亭四迷

三重

饗庭篁村

壺井栄

近江秋江

高浜虚子

滋賀

近松秋江

安倍能成

内田百閒

横光利一

馬場孤蝶

徳富蘆花

新村出

彦根城

関ヶ原百里

尾崎士郎 二五

吉野山と吉野川

「野晒紀行」のあと

萩原井泉水 二五

赤いぜんざいの大提灯

京に着ける夕

夏目漱石 二六

嫩草山

奈良より

島村抱月 二六

光悦寺の茶席から

早春の旅

志賀直哉 二七

畝傍山

葛城山の雨

幸田露伴 二七

瓢亭の入口

朱雀日記

谷崎潤一郎 二八

那智の滝

遍路

斎藤茂吉 二八

祇園の寺で

十年振

永井荷風 二九

塩津

熊野路の旅

柳田国男 二九

東山のプロフィール

京都

蒲原有明 三〇

三井寺からの風景

洗塵紀行

佐藤春夫 三〇

竜安寺の石庭

京洛日記

室生犀星 三一

高野山女人堂

高野山の春雪

佐藤春夫 三一

大徳寺の苔の庭

京の四季

和辻哲郎 三二

千日前の賑い

京阪見聞録

木下李太郎 三二

大徳寺高桐院の庭

西京遊記

広津和郎 三三

法善寺

木のない都

宇野浩二 三三

干拓された巨椋池

巨椋池の蓮

和辻哲郎 三四

栴檀木橋

栴檀木橋

正宗白鳥 三四

宇治のお茶問屋

宇治

福原麟太郎 三五

新清水寺

新清水寺

荻原井泉水 三五

天の橋立

北国紀行

柳田国男 三六

道頓堀

大阪の夕

寿岳文章 三六

橋立遊記

長与善郎 三七

妙国寺の蘇鉄

泉州行脚

長谷川如是閑 三七

猿沢の池から興福寺の塔

奈良の旅

安倍能成 三八

明石から淡路島を見た

須磨明石

長塚節 三八

唐招提寺

十月

堀辰雄 三九

夜景

淡路

野田宇太郎 三九

法隆寺中門と五重の塔

白い砂土道

里見淳 四〇

鳴門の渦

城の崎にて

志賀直哉 四〇

夢殿

夢殿の救世観音

広津和郎 四一

城の崎付近の円山川

山陰の風景

木下利玄 四一

飛鳥寺付近から耳無山

飛鳥

薄田泣菫 四二

山陰の風景

鳥取

香具山

乗馬靴

会津八一 四三

浦富の海岸

山陰土産

島崎藤村 四三

吉野山と吉野川

吉野の山

亀井勝一郎 四四

浦富の海岸

山陰土産

島崎藤村 四三

伯耆の日本海
鳥取駅前

日本海に沿うて
鳥取

小泉 八雲 三三
志賀 直哉 三三

道後平野と山々をのぞむ
波止浜公園から
八幡浜港

初旅の残象
内海点描
南予枇杷行

安倍 能成 三三
吉井 勇 三三

松江の水郷風景

松江印象記

芥川 龍之助 三三

天 赦 園
舟から見た岩城島

四国から近江路へ
島 二 題

小杉 放庵 三三
若山 牧水 三三

松江堀端の風景

二葉亭研究の旅
―水郷松江をたずねて―

中村 光夫 三三

岩 松
伯方島全景

東京から四国への道
海南小記

獅子 文六 三三
吉井 勇 三三

境 港

隠 岐 島

火野 葦平 三三

伯方島全景

海南小記

吉井 勇 三三

小泉八雲の旧居

小泉先生の旧居を訪ふ

厨川 白村 三三

正宗寺子規堂

四国四話

大内 兵衛 三三

独歩の碑と馬島

三人の旅
山口から岩国まで
下関より萩まで

井伏 鱒二 三三

五台山から浦戸湾をのぞむ

土 佐

安倍 能成 三三

今ものこる萩の士族街

萩から山口まで

河上 徹太郎 三三

吸江寺から入江を見る
白礁付近から足摺岬方面を見る

高 知
岬の僧坊にて

安倍 能成 三三

瑠璃光寺五重の塔

山口附秋芳洞

河上 徹太郎 三三

物部川と韭生の里

海南雜記

上林 眺 三三

原民喜の碑

広島日記

佐藤 春夫 三三

足摺岬灯台

大隅国喜界島

辻村 太郎 三三

宮島の大鳥居

広島風土記
―早廻り記―

井伏 鱒二 三三

吉野川風景

土佐の和紙村

壺井 栄 三三

志賀直哉の旧居

暗夜行路の尾道

中村 光夫 三三

モラエスの墓

徳島見聞記

佐藤 春夫 三三

港から見た玉島の町

玉島円通寺

吉井 勇 三三

靈 山 寺

にはかへんろ記

久保田万太郎 三三

葵橋から

山 遊 び

木下 利玄 三三

琴 平

琴 平

宮本 百合子 三三

吉井川の川口

備前街道

井伏 鱒二 三三

琴 平

四国の旅(通信)

柳田 国男 三三

電車の中から見た道後温泉

瀬戸内海縦断の旅

阿川 弘之 三三

愛 媛

四国の旅(通信)

福岡

柳 河

五足の靴

与謝野 鉄幹
北原 白秋
吉井 勇

三角港から

天草の春

熊 本

八幡の工業地帯

九州の旅
—新しき村訪問記—

長与 善郎 亮

球 磨 川

久恋の地山鹿温泉

長谷 健 亮
阿部 知二 亮

河内王の墓と鏡山

豊前鏡山

土屋 文明 亮

熊 本 城

小 国

尾崎 士郎 亮

柳 河

水郷柳河

北原 白秋 亮

杖立温泉

耶馬溪の一夜

高浜 虚子 亮

博多港からの展望

帰 省

宮崎 湖処子 亮

榎田の洞門

由布院行

田山 花袋 亮

陶工柿右衛門の家

有田紀行

火野 葦平 亮

金 鱗 湖

佐 賀

中谷 宇吉郎 亮

松 浦 湾

松浦あがた
からのみたと

蒲原 有明 亮

海 地 獄

佐しい放浪の旅

徳田 秋声 亮

からのみたと

保田 与重郎 亮

延岡城山城址

日向 路

野田 宇太郎 亮

長 崎

天の岩戸神社

高千穂日記

尾崎 士郎 亮

長崎の支那街（新地）
長崎の石畳（オランダ
坂）

筑紫雜記

吉井 勇 亮

国見ヶ丘風景

国見ヶ丘にて

尾崎 士郎 亮

浦上天主堂

今昔の長崎

永井 荷風 亮

桜 島

八月の霧島

吉田 絃二郎 亮

暮れゆく大村湾

長崎再遊

新村 出 亮

古里にたつ林美美子の
文学碑と桜島山

屋久島紀行

林 芙美子 亮

支那寺（崇福寺）

再遊長崎

佐藤 春夫 亮

指 宿

南国紀行

斎藤 茂吉 亮

諫早の眼鏡橋

考古遊記
—島原半島旅日記—

桑原 武夫 亮

島 泊 の 漁 村

佐多岬紀行

井上 靖 亮

大浦天主堂

長崎の印象

宮本 百合子 亮

鹿 兒 島 の 港

海南小記抄

柳田 国男 亮

雲仙への道すがら

南国巡礼

新村 出 亮

鹿 兒 島 の 港

沖繩の旅

浜田 青陵 亮

雲 仙

火野 葦平 亮

鹿 兒 島 の 港

沖繩の旅

大竹 新助 亮

対馬の竹敷の踊

雲 仙

火野 葦平 亮

かけあし撮影紀行

大竹 新助 亮

熊の足跡

徳富 蘆花

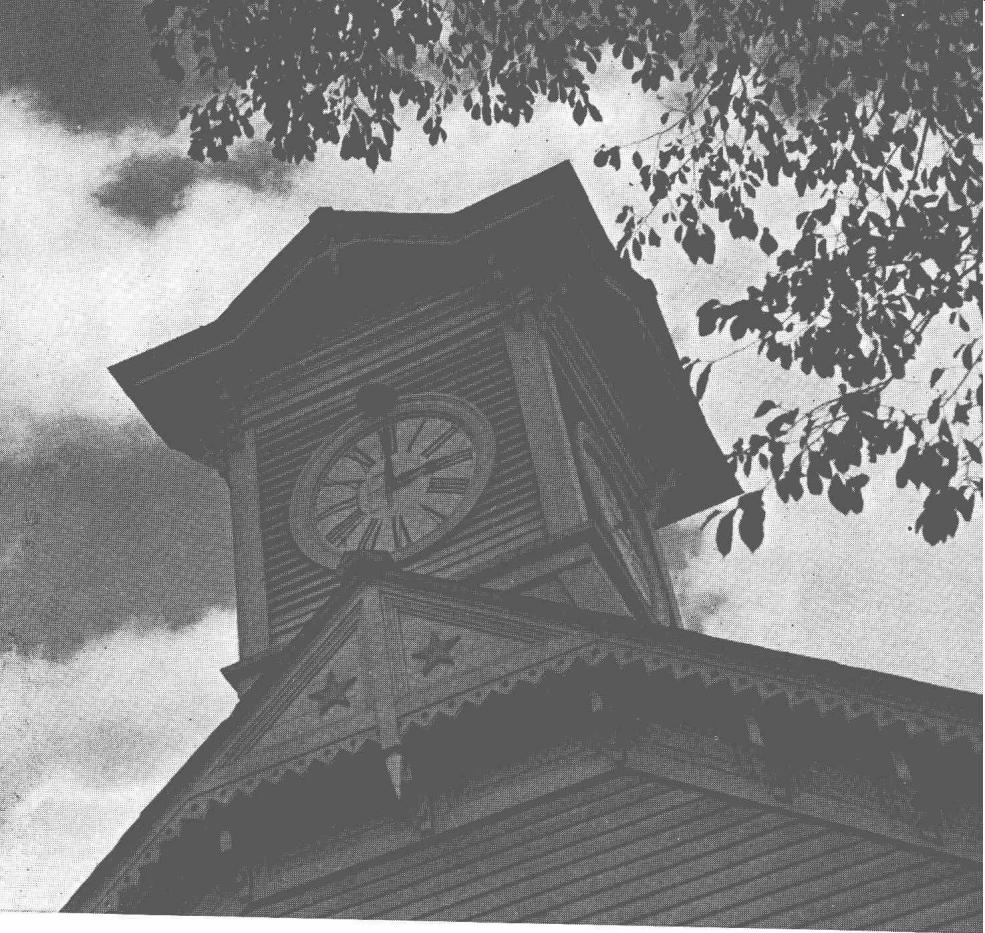
北海道

函館から一時間余にして、汽車は山を上り終へ、大沼駅を過ぎて大沼公園に來た。遊客の為に設けた形ばかりの停車場である。ここで下車。宿引が二人待つて居る。余等は導かれて紅葉館の旗を轡に立てた小舟に乗った。宿引は一礼して去り、船頭は帆と櫓声を立てゝ漕ぎ出す。

黄金色に藻の花の咲く入江を出ると、広広とした沼の面、絶えて久しい赤禿の駒が岳が忽眼前に躍り出た。東の肩からあるか無いかの煙が立上つて居る。余が明治三十六年の夏來た頃は、汽車はまだ森までしかかゝつて居なかつた。大沼公園にも粗末な料理屋が二三軒水際に立つて居た。駒が岳の噴火も其後の事である。然し汽車は釧路まで通うても、駒が岳は噴火しても、大沼其ものは旧に仍つて晴々した而して寂かな眺である。時は九月の十四日、然し沼のあたりのイタヤ楓はそろゝ染めかけて居る。処々樺や白樺にからむだ山葡萄の葉が、火の様に燃えて居る。

大沼

(北日本篇 四―五頁)



北海道遊記

宇野 浩二

しかし、その大通りを北にすすんで、しばらく行つて、右にまがつた角にある、『時計台』のまへに立つた時、私は、札幌には、やはり、いい物があるな、と思つた。これは、正に、私がもとめてゐた『詩』である。建て物は、小さく、古びてゐて、貧弱なやうに見えるけれど、前にたたずんで眺めると、風雅で、何ともいへぬ趣きがある。階下は図書館になつてゐるが、上に塔があつて、その塔が時計になつてゐるのである。これは明治十四年に装置されたもので、自鳴鐘がついてゐる。私が、その緑色のアカシヤにつつまれた、ロシア風の建て物の前に、しばらく見とれて立つてゐた時、ちやうど、その時計の鐘がカラン、カランといふやうに聞こえる音をたてて、鳴りだした。(牧水に『かたはらに秋草の花かたらくほろびしものはなつかしきかな』といふ歌があるが、これは、ほろびない、なつかしい、時計台である。)



東海の小島の思ひ出

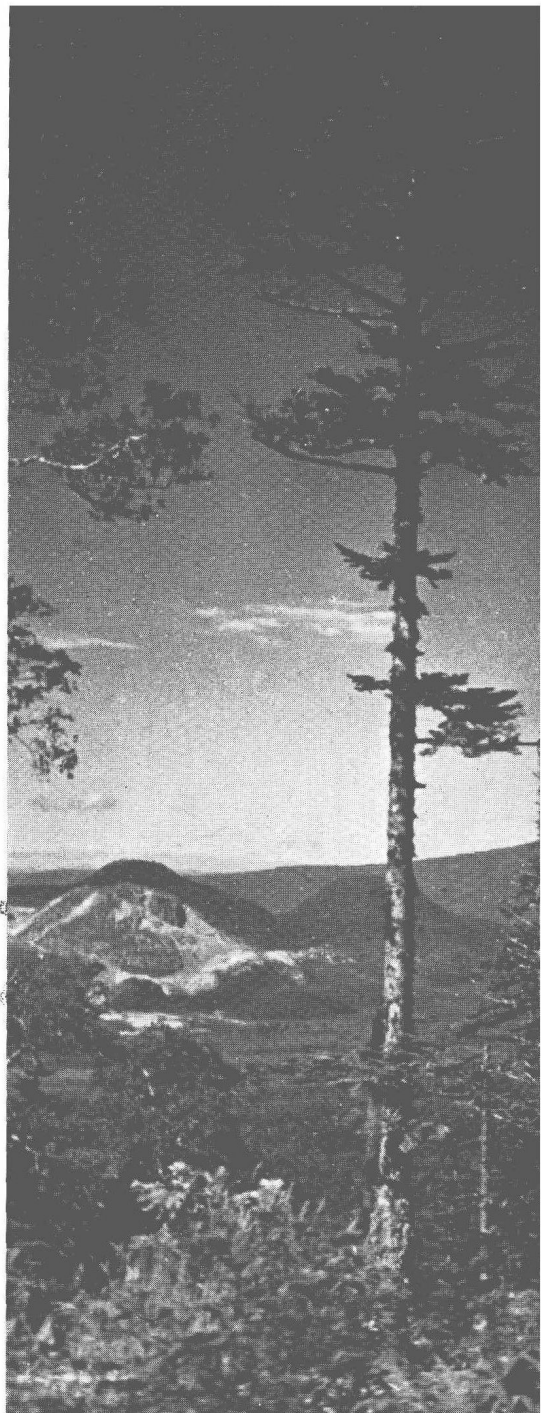
亀井 勝一郎

函館山は一名臥牛山といふ。北方正面からみると、ちやうど牛が臥せてゐるやうな形をしてゐるところからこの名称が出来た。臥牛山は高さ三百米ほどで、東海の小島の山であり、函館はつまりその山麓にひるがった町なのである。この山は明治以来ずっと要塞であつたので、当然登ることは許されなかつた。今度の敗戦で、実に久しぶりで解放されたのである。この山へ登ることは、幼年時代からの私のあこがれであつた。終戦後まだ一度も帰省してゐないので、未だ登る機会はないが、それだけに空想は大きい。今度帰つたら真先に登つてみたいと思つてゐる。

山頂に立てば、津軽海峡はむろん、松前の山々も、恵山も、横津岳も駒ヶ岳も、町も港も、つまり北海道の南端全体が一望のもとに眺められる筈である。要塞であつたため、自動車道路もひらけ、徒歩では三十分ほどで山頂に達するといふ。

函館山

(北日本篇 四九頁)



北海道紀行

桑原 武夫

二十九年前には、アイヌはともかく彼等の刻み方によつて彫つたステッキなどを売っていたのであつたが。夜、土産物屋のはげしい電灯の光をうけて、みすばらしいモンペ姿のアイヌの老婆が杖にすがり、口のまわりに入墨した恐ろしげな

顔をしてただずんでいたのは、亡びゆく人種の無意識的なうらみの象徴のようで、正視にたえなかつた。

この辺の原始林はうつそうと茂つてゐるが、内地の森のように暗い感じがしない。お化けが出そうな感じは全くない。もしお化けが出るとしたら、どんなものだらうかと考えた。少なくともそれは日本の古典的化け物ではありえない。

その原始林の中を走るバス道路のわきに、ところどころ石の地蔵が見える。この昭和六、七年ごろの難工事は、どうせ監獄部屋システムによつたのだらうが、この山の中で酷使されて死んだ人々のために親分が罪ほろぼしに立てたのかと想像した。

阿寒の原始林

(北日本篇 二三頁)



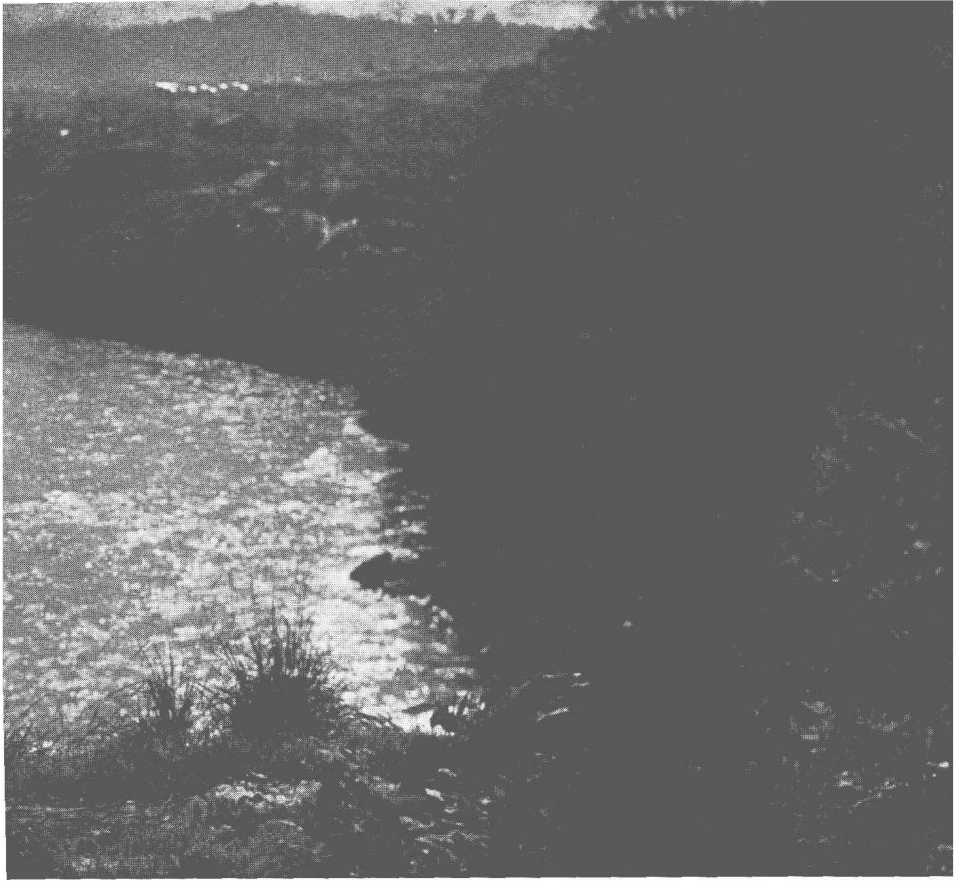
千歳線風景

伊藤 整

だが、私には、火山灰地だといふことが分つたことよりも、この風景の佗しさに心をうたれた。幾駅ものあひだ、駅とその官舎らしい建物のほかに、村らしいものもなく、農家も見えない。何という荒涼とした風景であらう。人間はこの土地に住まないのだ。低い木々は、まるで大広場に群れた限らない群集が、同じやうな高さ、同じやうな姿で、ひしめき合ふやうに、隙間なく立ち並んでゐる。何の木だらう。植林したものとも思へないが、雑木だからある時切られると、そのあとまた自然にかうして生え揃ふものなのだらうか。それとも木はこの土地の薄い壤土から取れるだけの養分をとつて育つて来たが、これ以上大きくなれないまゝかうして同じ位の高さで群れてゐるのだらうか。小さな駅のそばに木炭が何十俵か積み上げてある。いかにもそれは、この土地ではこの外に何一つ生産できないのです、と言つてゐるやうな淋しい印象であつた。

千歳線風景

(北日本篇 五四頁)



空知川の岸辺

国木田 独歩

宿の子のまめ／＼しきが先に立ちて、明くれば九月二十六日朝の九時、愈々空知川の岸へと出発した。

陰晴定めなき天気、薄き日影渡るゝかと思へば忽ち峰より林より霧起りて峰をも林をも路をも包んでしまふ。山路は思ひしより楽にて、余は宿の子と様々の物語しつゝ身も心も軽く歩ゆんだ。

林は全く黄葉^{きば}み、蔦紅葉は、真紅に染り、霧起る時は霧を隔て花を見るが如く、日光直射する時は露を帯びたる葉毎に幾千万の真珠碧玉を連らねて全山燃るかと思はれた。宿の子は空知川沿岸に於ける熊の話を為し、続いて彼が子供心に聞き集めたる熊物語の幾種かを熱心に語つた。坂を下りて熊笹の繁る所に来ると彼は一寸立どまり、『聞えるだらう、川の音が』と耳を傾けた、『ソラ……聞えるだらう、あれが空知川、もう直ぐ其処だ。』

『見えさうなものだな。』

『如何して見えるものか、森の中に流れて居るのだ。』